



新体制になって気持ちを新たにという部分と、バンドが第2章に突入するという提示と進化した姿をしっかりとらめた1枚に仕上がっています

も気を遣ってSxunさんと相談しながら、「ここはもっと優しい方がいいんじゃないか」とか「ヴォーカルの表情が見えるように」ということは意識してやりましたね。バラードのTrack.8の「Rain Inside Your Eyes」は特にそういうところを意識したので、生感があったのかなと思います。

ー楽曲に関してはいかがですか？

Sxun：バンド・サウンドがラスベガスの軸だと思っているので、キーボードや打ち込みが多すぎると偏ってしまう気がしました。ちゃんと全体を見てキーボードや打ち込みがどれくらい使われているかを意識しながら作りましし。実際のライブに近くなるように、あまり機械に頼らずアナログなスタイルでレコーディングしてるので、そういう意味でも今回音作りにかかっているのが生感を出せるのかなと思います。

ー歌曲ビジュアルさせていただけますが、まずはSE的なTrack.1「Are You Ready to Blast Off?」で始まりますが、「飛び立つ準備はできてるか？」というタイトルからアルバム本編への旅立的なSEという位置付けでしょうか？

Sxun：第2章へ突入するというような意味ですね。アルバムを聴き始める準備はできてるかという意味もありますね。So：あとはTrack.2の「Rave-up Tonight」にも繋がっていて、「Rave-up Tonight」は「思いっきり騒ごうぜ！」って意味を曲名に込めているので、それに向けて「準備はいいか？」っていう意味でもあります。

ーSxun君のヴォーカルやKei君のスラップ・ベースなどもフィーチャーされた今年1月1日シングル・リリースされたTrack.2「Rave-up Tonight」は新体制ラスベガスの名詞代わりの1曲でしたが、この曲を軸に観えてアルバムを作りあげていったのでしょうか？

Sxun：軸というよりは、アルバム制作基準のハードルにしてみました。専ら良い楽曲だと今でも思っていますし、「[All That~]を経て、1発目にこの曲を出して、全曲これと同じクオリティで出せたら今自分たちが目指してるアルバムが作れるな」とずっと意識は持っていました。

ーある意味で判断基準になっていたんですね。この曲はラスベガス過去最高のオリコン3位を記録していますが、新体制の門出のリリースが最高の実績を生んだことで何か思うことはあったのではないですか？

Sxun：嬉しい気持ちもあるけれど、正直まだ上に行けるという怖しさもありますね。ただあまり順位はこだわっていないので、どちらかという曲の反応の方が気になりました。MV見て反応も良かったり、ライブでやってみていい反応も良かった方が「良い曲でできたな」って実感が持てますね。

ー先日MVが公開されたTrack.4「Thunderclap」は最近のラスベガスのエッセンスがキッと詰まっている楽曲だと感じました。Taiki君の雄叫びやSxun君の中音域のクリーン・ヴォーカルなど、ラスベガスが身に付けた新しい要素が詰まった曲だと思いました。

Sxun：ありがとうございます。自分たち本来のツイン・ギターのリフで押して行く部分や、コアでラウドな部分など、勢いが強い曲になっていると思います。割りと自分たちの持ち味の延長線上のスタイルに新しい要素を入れることができました。

ーMVは演者の手元を中心に撮影していますが、これは各メンバーのテクニカルなプレイをフィーチャーしたいという考えからでしょうか？

Sxun：そうですね。この曲はフレーズごとに推しているパートが違うので、今までだったら全曲どきどきポイントとちがってたんなんですけど、「今イッツとイッツがハマってる」というようなまでビジュアルで表現することが今回の撮影方法だったんです。

ーそして先ほど少し話に出たライブ・ヴォーカルも入っているTrack.7「Nail the Shit Down」はバラティに富んだこのアルバムの中でも特に真実を放った楽曲ですね。これは最初からミクスチャー・テイストの楽曲を意識して制作したのでしょうか？

Sxun：そうですね。仮タイトルが「ミクスチャー」だったんです。ただ、歌をどうするかと悩んで、歌ってシャウト推してもいいかなって思ったんですけど、シャウトだけやってみた時にちょっと物足りないんで、歌も入れてみる形ですけど、それもしがやなくて、最終的にラップを入れる形になったんです。あと一瞬Taikiさんの実声も聴けるパートがあります（笑）。

ーそうなんです（笑）。この曲は結構攻めた曲ですね。こういうミクスチャーのタメをきかせたグループのある曲ってラスガスとしては1番不得手なジャンルんじゃないかなと思いました。

Sxun：ミクスチャー・サウンドってシンプルなフレーズがいいと思うんです。だからこそ難しいですよね。リズムの感じとか、1番リリが良い感じは既に世に出尽くしているんで、最終的には何もやらないって意味でコード進行を無視するということでも落着いたんです（笑）。ギターとキーボードはあえて散らかしてあげたか、自分たちで弾いても「これ合ってる？」って聞いてました（笑）。そういう違和感や上手く使いましたね。

ーTrack.9「Counterattack by~」はアルバム中最もカオティックな楽曲ですがコアより溢れる展開が秀逸ですね。歌詞もユーモアがあるのかもしれないです。

So：嬢の歌です。だから「ゴマ粒サイズの体（Sesame Sized Bodies）」なんです。嬢が頑張ってるってところを想像して作りました（笑）。「コア」って仮タイトルだったんですけどおさ感も入れ込んだようにという話になって、Minamiの不気味なシャウトだったり、今までは見られぬヴォーカル・スタイルをたくさん取り入れてました。

ーラスベガスには複雑な展開の楽曲が多すぎますが、こういう楽曲がどうやってまとまっているのかすごく興味があります。

Sxun：「Counterattack by~」は1番最後に完成した曲なんですけど、実は制作期間がほぼゼロだったんです。アルバム曲数を1曲減らすという話まで出たのですが、なんとかが

Sxun (Gt) So (Clean Vo/Prog) インタビュアー：村岡 俊介 (DJ ムラオカ)

Sxun：神戸ワールド記念ホールってバンドがライブするような規模の会場ではなかなかないので、そんな大規模な会場でワマンをやることに少し不安もありました。でもいざ本番が始まったら、自分たちのファンが応援してくれてる人だけで会場が満員になって、こんなにたくさん自分たちを応援してくれる方がいるんだという実感が、その会場を自分たちの方で埋めることができたということに感動しました。あとはもうほんとと覚えてないくらいあつという間でしたね。

ー初ワマンが終わったことで、新たに見えてきた景色はありますか？

So：地元でのライブであれだけの人に来てくれたことが単純に嬉しいという気持ちもありますが、もうワマンでいよを羨まされることすごい嬉しいなとも思っています。これからはもうこういう規模でのワマンに挑戦したいし、さらに大きなところでやりたいたいとも思いました。

ーそしてワマンという節目を越えて、3枚目のアルバム「PHASE.2」が完成しました。文字通りラスベガスが第2段階（フェーズ）に突入する作品となっていてと思います。2ndアルバム「[All That We Have Now]」リリースからちょうど2年を越えてのリリースですが、リリース間隔が短くなってきていて今ワマン全体の状況下で、2年というリリース期間はかなり長いと思うのですが、いかがですか？

Sxun：「[Dance & Screams]」「[EXTREME]」「[All That We Have Now]」と3の作品で1つの流れだと自分たちでは考えていて、「[All That~]」が1つの集大成だということも言っていましたし、次のアルバムが相当良くないとみんなをガッカリさせてしまっていたので、ハードルを高めに設定して制作を始めたんです。前作「リリース」直後はアイデアを出し切っしてしまっただけ何もなかったし、それならしっかり時間をかけて、高めに設定したハードルを越えられるものを出したかったんです。ですので最初から急いでリリースするつもりはなかったですね。

ー楽曲の制作を開始したのはいつ頃だったのでしょうか？

Sxun：リリース直後から作っていくって話だったんですけど、シングル曲以外の制作はその直近のライブなどにどうしても気持ちがいってしまっ。あまり制作に没頭できなかったんですけど、制作作業も後半になるにつれてスピードが上がってきました。またアルバム制作以外にもバンドが抱えている問題もあったので、そういう問題の方を優先していた感じですね。

ーメンバー・チェンジもありましたもんね。その2年という期間を設けたことは結晶的に良かったのでしょうか。ちなみに楽曲制作やレコーディング方法など制作過程で見直した点はありますか？

Sxun：制作の部分でいうとベースがKeiに変わったんで、ベースのアレンジですね。「Rave-up Tonight」でもそうですけど、どんだんバンド・サウンドにベースのアレンジを

取り入れていったんですけど、新しい音が自立してくると、どれを引込めるとかというバランスが難しくなりました。

ーラスベガスはもともと音数が多い方ですし、そこにさらにKeiくんの派手なベースが入ってきますもんね。

Sxun：やっぱりベースを押しすぎると全体のバランスも悪くなると思ったんで、うまく必要所で見せ場を作っていたかったんです。制作に関してはキーボードのMinamiと2人でスタジオ以外でも一緒に集まって曲を作ること始めました。制作面っていつもそこが大きく変わりましたね。制作経験はリハーサル・スタジオでみんなが集まって、俺とMinamiがロビで作業して、メンバーはスタジオでフレーズを練習したり、ライブの曲を練習したり、分担することも多くなりました。前作まではそういうことはなかったですね。

ーアルバムを聴かせていたばかりでしたがバラティに富んで、かつ、プロダクションな作品ですね。バラティに富んだリリ前衛的な作品のすべてが素晴らしいものとは限りませんが、逆に厳選になったり自衛的な作品になってしまふもので、少し今はラスベガス特有のサウンドと実験的要素や音楽性の振り幅が、絶妙なバランス感で盛り込まれていて素晴らしいと思いました。そこはかなり喜んでましたし、いかがですか？

Sxun：曲単位というよりアルバム全体で考えて最初から作っていたんです。こういうテーマの曲をここに入れてどうさっくとしたイメージがあって、全体を見てそのバランスを取った感じですね。

ーなるほど。またメタルコアにしてもスクリーモにしてもミクスチャーにしても、ロックのジャンルにはある程度決められたフォーマットがあると思うんですけど、そのフォーマットの中でできるだけやりたいものを作ろうとするバンドはたくさんいますか。そのフォーマットを壊して乗り越えていってってバンドは稀有なバンドじゃないですか。ラスベガスからは後者の意思を感じたのですか？

Sxun：自分たちの良い部分は思いやり研ぎ澄ましていきたいですし、とはいえない要素も取り入れていきたいですね。ラスベガスだからこそできることものすごく多いと思うんです。楽器も多し、それぞれのアプローチも多岐だから、そういう部分を活かして他のバンドにはできないアルバム作り、楽曲制作を意識してますね。

ーまたアルバム全体に言えることの1つとして、生感をうまくフィーチャーしてるなと思いました。アルバム全体を均してみれば今まで同様エレクトロ、シンセ・サウンドがフィーチャーされていますが、ポイントポイントでメリハリつけて生感を際立たせている点がとても良いなと感じました。

So：嬢の歌です。だから「ゴマ粒サイズの体（Sesame Sized Bodies）」なんです。嬢が頑張ってるってところを想像して作りました（笑）。「コア」って仮タイトルだったんですけどおさ感も入れ込んだようにという話になって、Minamiの不気味なシャウトだったり、今までは見られぬヴォーカル・スタイルをたくさん取り入れてました。

ーラスベガスには複雑な展開の楽曲が多すぎますが、こういう楽曲がどうやってまとまっているのかすごく興味があります。

「Counterattack by~」が完成して、できたものをメンバーが立ちに聴いて、各々のパートを細かく修正してレコーディングに臨みました。作業のスピードが速くなったわけではないので分らないですが、作業中にミスしたテイクやテμποを誤ったものは、あえてそのまま活かしてみたりと、そういうリレギュラーなこともうまく活用したとは聞いてます。

ー最終的には「意図的でないものを意図的に入れた」ということですね。

Sxun：そうですね。普通であれば思い付かないようなアイデアなんですけど、ラスベガスってこういうこともできるんだって驚かせることはできたんじゃなかったと思います。

ーヘヴィな中にもちゃんとキャッチーさなどがどこかに存在するのがラスベガスですね。振り切った曲でもラスベガス好きを残しつつ音も入れられる、という、あと全体的に感じたのが、ほとんどのバンドはここでジャンプさせて、ここでSTEPさせて、ここでシンカリングさせて、とお客さんがフロアで盛り上がる様を最重要視して楽曲を制作しています。そういう点ではラスベガスは、お客さんに煽を売ってないというところが最重要視している感じはしませんか？

Sxun：まあ実は……今回のアルバムのもう1つのテーマとして、ライブ映えるというのが想像して……（笑）。

ーもちろんライブ映えはすると思いますが（笑）。なんだろう……要は今のバンドってライブ、キッズの好みを気にし過ぎて楽曲がワンパターン化してきていると思うんです。

Sxun：確かに僕たちの場合、1曲を通してというわけではなくて、1曲のうち1箇所のみミキシングをお客さんにどういう動きをやりたいかということ意識しました（笑）。So：楽曲の1ヶ所に焦点をあてて、「Thunderclap」はここでもみんなに手拍子させるとか、「Swing !!!」だったらここでタオルを振って欲しい、などですね。

ーなるほど。そういう狭い視点を持った上で、他のバンドとは似かよってこないのはすごいと思いますよ。やはり狭いフィールドの中で同じ目的意識を持って制作していれば必ず似てくると言うので、ただラスベガスは同じ目的意識であっても自分たちのエッセンスを入れて個性化されずにオリジナリティに溢れている。それはすごいことだと思います。

Sxun：確かに僕たちの場合、1曲を通してというわけではなくて、1曲のうち1箇所のみミキシングをお客さんにどういう動きをやりたいかということ意識しました（笑）。So：楽曲の1ヶ所に焦点をあてて、「Thunderclap」はここでもみんなに手拍子させるとか、「Swing !!!」だったらここでタオルを振って欲しい、などですね。

ーそしてアルバム最後を飾る7分越えの大作、Track.11「Stay as Who You Are」ですが、社大ドラマティックな楽曲ですね。最初からこういった長編の楽曲を作るというテーマを基にスタートしたのでしょうか？

Sxun：そうですね。仮タイトルが「長い曲」だったんで（笑）。でもともアルバムを作る時に1曲長い曲を作れたらどうかというアイデアがあったんで試してみたいんです。長い曲をライブでやることなるコンパルトにないといわれちゃうし、今までの曲もそれを意識して作っていたんですけど、今回あえて長い曲に挑戦してみました。

ーこの曲は展開も面白いですが、他のラスベガスの楽曲は急転直下で目まぐるしく変化していく、例えるならジッターストーカーのような短編小説ですが、この曲は起伏も展開もたたくさあるんです。流れるように人々に受け入れられています。例えるなら山あり谷ありの壮大な長編小説、スエダタルだと感じました。他の楽曲とは明らかに趣が違うなと感じたのですが、

Sxun：やっぱり曲のフェーズを繋ぎ合わせたただ少し強引になってしまっんで、繋ぎ目の転調やBPMの変化、アレンジに関してはかなり気を遣っています。前作で2曲ぶたえたようなツキハギな裏目にもなっておかしいので、1曲の構成として意味があるものになるように気を遣っています。

So：この曲は全部構成で長い曲だけに聞きさせて「じゃ、と最後まで聴かせるようにしたい」と思っています。あと少し短いMVで終わって、その強弱も変化していくパートがあるんですけど、そそでの切り替わりを伝えるためにこのアルバム唯一の日本語を使っている点にも注目して欲しいです。

ー最後に激ロック読者にメッセージをお願いします。

Sxun：新体制になって気持ちを新たにという部分と、バンドが第2章に突入するという提示と、進化した姿をしっかり込めた1枚に仕上がっています。俺個人としてもこの作品で間違いないハードルを越えられました。自信を持って出せるクオリティは仕上がってるので、ぜひ聴いて欲しいですね。ライブが力を発揮するイメージで作っているこのアルバムを聴いてツアーにも遊びに来て欲しいですし、どれくらいライブで遊べるかを証明したいなとも思っています。

So：バラティとしても作品としても第2形態のラスベガスができたと思っています。精神的な面でも気持ちも新たにしているんで、今後のライブでの作品の楽曲がプレイできるのがすごく楽しみです。今年も夏フェスにもたくさん出演しますし、リリース・ツアーもあるんで、早くみんなに聴いてもらって、ライブで楽しんでも欲しいですね。

インタビューの書きは [激ロックウェブサイトをチェック!!](#) **>>> GEKIROCK.COM**

